

平成24年度 第1回千葉県立博物館協議会 議事録要旨

1. 開催日時：平成24年 7月26日（木）13時30分～16時00分
2. 開催場所：千葉県立中央博物館
3. 出席者：
(協議会委員)
反町 京子、鶴澤登美子、水島 陽子、大森喜美江、米本 信、
西田 治文、小野 勝弘、齊藤 泰嘉、常光 徹（以上、委員10名中過半数以上の出席があり協議会は成立）
(博物館)
美術館長、中央博物館長、現代産業科学館長、関宿城博物館長、房総のむら館長
(教育委員会)
文化財課長
4. 傍聴者：なし
5. 議長・副議長選出
(委員の互選により、議長に小野委員、副議長に岡本委員を選出した。)
6. 議事① 各博物館の現状について協議した。
(各館が使命や事業実績など、館の概要を説明。)

【質疑応答要旨】

委員：大利根分館の入館者が昨年度3倍になった理由はどこにあるのか？

大利根分館：これまで大人向けの展示が多かった分館において、本館に収蔵されている昆虫標本をはじめ分館で展示し、さらにチラシ約4万枚を、近隣小学校の全児童に配布したことなど、子ども向けに絞った取組をしたためであると考える。

委員：現代産業科学館と房総のむらの研究職員の専門を教えてください。

現代産業科学館：平成6年度開館の理工系の科学館ですが、理工系の専門職員の採用はなく、主に学校教員が異動し当館の専門業務を担当している。また、人文・歴史系など他の分野の専門職員も担当している。

房総のむら：考古2名、歴史4名、栄養1名、美術1名、生物1名の専門職員がおり、また館長は行政職ですが本来考古の専門家です。またこのうち生物の専門家1名は、中央博物館から異動した菌類（キノコ）の専門家です。

委員：中央博物館本館はデパート、そして大利根分館は近隣の小学校などと連携しているようだが、交通の便の問題等もあり、個人で来館するのは困難な場合がある。年間を通し、地域に出前して事業を行うことはできないか。

中央博物館：地域への出前は、できるだけ多くの依頼に応えたいと考えているが、すべてに応えることができているわけではなく、そのような中で、特定の場所で連携事業を常態的に行うのは、公平性の観点からなかなか難しいのが現状である。

委員：現代産業科学館では団体工作教室をやっているが、どのように行っているのか。

現代産業科学館：工作のメニューが10近くあり、その材料費は出してもらっている。

委員：団体で工作を行いたいとき、どうしたらよいのか。

現代産業科学館：年間行事としてチラシで案内している工作教室は、団体向けではないが、事前に予約してもらえば個人とは別枠で工作を行ってもらえる。また予約の際、HPで紹介しているメニューから工作内容を選んでもらえば、職員の出勤シフトも考慮した対応をすることもできる。

委員：各館の現状説明では、博物館の社会教育に関するものが中心になっているが、博物館は研究活動も行っており、研究活動はどこで評価しているのか。

事務局：県立博物館では、各年度に自己評価を行っており、そこでは調査研究も含め、すべての博物館活動が評価の対象となっている。前年度の評価報告書は現在作成中であり、次回にはお渡しできると考えている。

委員：美術館に行った際、女性用トイレの鏡のライトが故障・点滅し、さらに天井からクモの巣が張っていた。美を提供する場所で、このようなことが放置されているのは残念だ。来館者に対し、もっと基本的な気配り・心配りをしてほしい。

美術館：真摯に受け止め、今後そのようなことがないよう対応したい。

委員：現状説明の中に美術館友の会というのがあったが、ボランティア団体なのか。また、各館にボランティア団体はあるのか。

中央博物館：友の会は任意団体で、博物館を活用しより広く、より深く学びたいという人の集まりだが、博物館のさまざまな活動に協力してくれるボランティア団体でもある。現代産業科学館以外の各県立美術館・博物館に存在する。

議長：各館は展覧会だけでなく、学習支援など地域に密着した活動を行っていることを評価したい。

委員：館蔵資料を積極的に活用した展示を行うというのは努力の結果であると思うが、山下清展や小惑星探査機はやぶさの展示など、いくつか実績が突出した企画がある。どういう経緯で行った企画なのか知りたい。

美術館：山下清の展覧会は、企画会社からの買い取りの企画であった。企画の決定に当たっては、ちば文化発信事業という特別に獲得した予算で実施したため、千葉県とかかわりのある企画であること、美術館の展示室の広さに対応した企画であること、そしてこれまで他館で開催した際の入場者実績が高いこと、さらに準備期間が限られていたため、年度内に実施できる企画であることなどの条件を検討した。山下清は、市川市内の学校出身で千葉県と深いかわりのある作家であり、展覧会では遺族からの多大な協力をいただいた。また知名度も高く、こどもからご年配の方まで、あらゆる世代の方が来館してくださり、県立美術館38年の歴史でも突出した実績を上げることができた。

現代産業科学館：「帰ってきた探査機『はやぶさ』」展は、世界的に注目された探査機を展示する企画であった。できれば当館は、国内最初の展示会場となることを狙ったが、結局、国の施設には勝てなかった。ただし、首都圏最後の展示会場として選ばれたため、最後の機会を見逃すまいと、たくさんの方に御来館いただいた。千葉県はロケット開発発祥の地であることから、「千葉から宇宙へ」というコンセプトを前面に出し企画を構成した。たとえば、民間航空発祥の地は稲毛であることを説明したり、千葉県出身の宇宙飛

行士である山崎直子さんを、産休取得の直前にJAXAでインタビューすることに成功し、そのビデオを紹介したりした。館外から多くの資料を集めるため、職員一丸となって各地へ出張したが、その過程で、「はやぶさ」に独特な思いを持っているマニアの方が全国にいたことがわかり、そのような方を特別解説員として、展示場所を自由に使うことにし、これも好評であった。また、子ども向けに、オリジナルビデオを制作したり、本物につながる模型を借用してきたりしたことも、好評を得た一因であると考えている。

中央博物館：自然誌系では、昆虫と恐竜は、必ず当たるテーマである。また大根分館では、子ども向けのPRを今まであまりしたことがなかったが、今回、児童一人に1枚ずつチラシを配ることで、効果が上がったと考える。

委員：地元に応用するテーマをうまく利用することは大事で、たとえば高知県では坂本竜馬に関係する事業をやると、必ず当たるというようなことがある。

委員：予算のない中で各館努力していることがわかりました。子どもたち自身でパンフレットを作ってもらった経験や、環境教育の教職員対象研修をした経験などから、子どもの目線、教職員の目線で広報資料などを作ることが重要であると考えている。また理科では動・植物標本、社会では考古学資料など、実物に触れる機会をつくるのが大切である。その意味で、工作教室や体験教室を楽しみにしている。本物に出あえるのが博物館の使命であり、それを活用するのが学校の使命である。またパンフレットなどの（広報資料）の配布の仕方も工夫が必要ではないかと考える。学校宛てに数部配布しても、ほとんど教職員や子どもたちには届かない。たとえば、（チラシに掲載した）クイズに応募すればプレゼントがもらえるなどを行ったらどうか。いずれにしても、学校への広報活動では、まず教員の心に火をつけ、教員を夢中にさせる工夫がまず必要であると思う。

委員：博物館というものの考え方をお話したい。千葉県の博物館を見ると、私の子ども時代よりも美術館・博物館が活性化していると思う。地域の教育は地域が担うべきという（時代にある）ことから、（地域の）博物館の役割は重要になってきている。文化系・理科系など異なる分野をひとまとめに議論するのは、むずかしいかもしれないが、少なくとも自然誌系博物館では、教育の源として底支えをしている研究活動や、（教育の）素材を提供する学芸員の質を維持向上させる必要がある。また標本を収集し管理する機能の維持向上も必要である。自然環境を継続してモニターするシンクタンク機能を果たすことが強くなっている。災害を含めたシンクタンク機能である。教育委員会の下にはあるが、その他の部署、たとえば土木や環境等その他の分野との関わりが出てくるだろう。分野別のかかわりをどう生かすのか、今の組織でどのようにするのか、足りないところもあるかもしれないが、100年先の構造を作らないといけないと思う。これから何ができるのか、私も勉強しなければいけない。

7. 議事② 協議テーマについて協議した。

（協議に先立ち、テーマ案「県民が学べる場としての博物館の新たな役割と新たな手法について」の趣旨を事務局が説明した。）

【質疑応答要旨】

委員：テーマの趣旨の説明であるがこれだけでは十分ではない。社会教育は、研究や資料収集などいくつかの機能のうちの1つだと思うが。

委員：研究とか資料収集については当然踏まえた上で、地域振興があるという認識である。

委員：文章でこのように残ると、研究や調査が前提ということが見えにくくなるのではないか。読み手の印象が変わるので、はっきりとその文脈を書いたほうがよいのでは。

議長：考慮してほしい。

事務局：考慮します。

委員：学べる場としての博物館となるには、美術館と博物館が県民により身近なものにならないといけない。それには日常的継続的な博物館とのかかわりを（県民が）見出さないといけない。そこで（これまでの）宣伝活動が、県民一人一人に届くように行われているか、お客様に足を運んでいただくために検証していかないといけない。NHKも同様で、テーマパークの存在を知らせ、（たくさんの方に）来ていただかないといけないし、さらには、リピーターとして来ていただけるよう、内容も考えなければならない。また些細なことかもしれないが、入館者と直接接する態度、挨拶、接し方、清潔さなど、お金がなくてもできることがたくさんある。このように、宣伝広報、内容、そして日常動作の3つが重要である。

議長：広報の専門家の立場からの御意見、ありがとうございました。

中央博物館：お客様に来ていただける施設として、学びの場所の雰囲気づくりを大切にしたいと考えている。

委員：大きなポスターと小さなチラシについて、経費的にどのような比率で製作しているのか。市民の目に触れないチラシをたくさん印刷するよりも、ポスターの方が効果的ではないか。

中央博物館：ポスターとチラシでは目的と効果が異なる。ポスターは掲示場所に影響されるが、多くの方の目に触れるものとなる。他方チラシは、（たとえば、学校の児童生徒全員に配布するなど、）個々人に配りじっくり見てもらえるため、提供できる情報量を多くすることができる。博物館では、（今後も事業の目的に応じて比率を考えながら）両方を活用していく必要があると思う。また経費的には、お金をかけない手刷りでのチラシ・ポスター制作も行っている。

現代産業科学館：ポスターの駅貼りは、駅構内のどこに掲示されるかわからないという欠点がある。「帰ってきた探査機『はやぶさ』」展では、電車の中吊り広告が、効果的だった。HPやチラシはあらかじめ興味を持っている人たちに見てもらえるものだが、中吊り広告は、車内で時間を持て余している人たちに見てもらえるという利点がある。またツイッターは、大変効果的であることがわかった。マニアが発信したツイートを見た人たちがたくさんおり、展示会開催の前から、すでにたくさんの情報が流れていたことがわかった。

議長：広報の効果は、どのメディアを用いるのかに依存するのだろうと思う。

委員：学びのニーズに、博物館は敏感になりすぎているのではないか。博物館は教育機関としてのコンセプトを再確認し、県民に何を学んでほしいのかの方向性を、より主体的に示すべきではないか。現在の学びのニーズの中には、その目指す方向とそぐわないものもあるかもしれない。コンセプトに沿ったニーズを選択する必要がある。もちろんその場合には、（博物館が県民にしっかりと）説明ができる能力を有していることが前提である。また現代産業館では、民間企業などとのやり取りが多いが、他館でももっと（民間需要を）開拓するべきではないか。（それを促進するため）、協力する企業

については、（ポスターの掲示料金の割引など）教育機関利用の減免を図るなどの工夫も必要ではないか

議長：博物館と民間企業とを結ぶ仕組みとして、現代産業科学館には、展示・運営協力会が存在する。

現代産業科学館：展示・運営協力会には、現在、88の研究所・大学・企業が会員となっている。千葉県の産業に係る石油・鉄鋼・電気・化学などにかかわる展示物の寄付をしていただいている他、実験工作教室・サイエンスショーで子ども向けの道具材料等を提供していただいている。また会員となっている企業等の先端的な取組を事例として紹介してもらっている。企業としても博物館に係ることで、企業だけでは難しい展示などの工夫も実施できるメリットがあると考え。たとえば、当館で、子どもたちに人気のあるカブトムシ・蝶などの昆虫を展示し、それに併せて、蝶の翅がもつ撥水性や構造色による発色などからヒントを得たDIC（大日本インキ）での発色技術開発などを紹介した。カブトムシは人気があり集客に役立ち、それにこのような提示方法ができるのは博物館だからであろうと考える。さらに、この会議室の3分の2程度のスペースを展示・運営協力会用のスペースとして提供している。(株)TOTOの新製品のテレビコマーシャルで放映した、便器の形状でインターネット端末の機能を持ち天気情報などテキストデータを読み上げ、ホームページからアクセスすると展示周辺の様子もモニターすることのできる機能を持つ装置を展示したこともあった。このような取組は今後も行いたいと思っている。

委員：科学技術分野は、企業との提携は比較的行いやすいと思うが、人文系や生物系などの分野でも、今後は提携を考えてほしいと思う。

委員：論点の中に調査研究の成果の活用という視点がある。これは、展示物や収蔵資料と異なり、人間（博物館研究員）の問題と関係することであり、職員ひとりひとりが、枯渇しないようにすることが大切であると考え。私の個人的な経験であるが、倫理社会の先生が社会科の授業で休暇中に聞き歩いたことを話してくれたことがあり、とても面白かったことを憶えている。同様に博物館においても研究員自身が面白さ、わくわくしたものを持っていないと、聞く方は面白くないだろうと思う。年々予算が減っているという現状と矛盾するかもしれないが、博物館での学びの質を高いものにするには、研究者の環境を整備し、研究時間を確保することも大事ではないか。

議長：研究論文集の紹介がないが、相当深くやっているのではないか。

中央博物館：研究は展示や教育普及の基礎と考えている。当館には、51名の研究職員がいるが、他館ではそう多くないため、研究に割ける時間を確保するのはなかなか難しいのが現状である。しかしどの館長も（研究は）重要なものとは思っており、研究時間を館の開館時間中にとるのが難しい場合には、休館日を利用するなど、どのような工夫ができるか頭を悩ましている状況である。

委員：教育委員会の組織図を見ると、文化財課の学芸振興室には、博物館以外の業務も多い。博物館の重要性を考えると、博物館行政に集中できる組織が必要なのではないか。関係部局と博物館との積極的な連携を図っていく上でも、そのような組織が本庁内にあることがよいと思うが、そのような組織の観点からの議論を、この協議会の場で行うことはできるのだろうか。

文化財課：本課の組織のあり方そのものを博物館協議会の場で議論していただいても、それを反映させていくのは難しいと考えるが、ご意見としてはいただき、今後機会があれば活かしていきたいと考える。

議長：

今回の協議会のテーマ（「県民が学べる場としての博物館の新たな役割と新たな手法について」）の論点の一つとして、地域や学校と連携した展示会やイベントの手法、というのがあるが、これについては、現代産業科学館に展示・運営協力会というよい例があると思う。この協力会は、90の研究所・企業・大学などから構成されており、平成4年の創立以来、協力会主催の展示会を開催したり、現代産業科学館と共催事業を行ったり、館の運営になくてはならない存在となっている。

他の県立博物館にも、博物館予算が年々減少してきている現状で、多様な学びの場のニーズに対応する手法として、現代産業科学館の展示・運営協力会のような、地域や企業と提携・連携する組織を立ち上げる必要があるのではないだろうか。たとえば、観光業界や観光協会、漁協や農協、道の駅や商工会、あるいは神社・仏閣など、多様な団体・企業との提携・連携を模索していくことが可能なのではないか。本博物館協議会の2年の議論の間に、こうした民間との連携の仕組みを考えるべきではないだろうか。

さらに、今盛んな江戸学など、地域の文化や歴史あるいは自然を学ぶ様々な取組と博物館が積極的に連携してはどうか。たとえば、博物館内で講演会を開催し、その受講者に〇〇認定・〇〇検定の資格を授与するというようなことで、確実な顧客の確保・あるいは県民の博物館への関心を高めることに繋がるのではないだろうか。

最後に、博物館研究員の研究発表・調査研究についても、何らかの発表の場を設けて、県民にその必要性をアピールしていることを考えるべきであると思う。次の機会に、このような論点について具体的な話があればこれに期待したい。

事務局：議長提案を、以下のような3つの議題として、次回以降の協議会に引き継いでいただきたいと考えている。

1. 多様な県民の学びのニーズに適切に対応していくため、「展示・運営協力会」など、民間や地域の活力を取り込む仕組みについて
2. 顧客の確実な確保を図るため、県民の「学び」への認定や検定など、博物館の存在価値あるいはブランド力を高める仕組みについて
3. 「学び」の土台を支える調査研究活動や資料収集・整理活動への県民理解を高めるため、研究成果を県民にわかりやすく周知する方法について

議事終了